



Title	社会環境の変動に対する心の可塑性とその限界：関係流動性の変化に伴う心理的順応の検討 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	小楠, なつき
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15532号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89571
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Natsuki_Ogusu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：小楠なつき

主査 教授 結城 雅樹
審査委員 副査 教授 高橋 伸幸
副査 教授 平澤 和司

学位論文題名

社会環境の変動に対する心の可塑性とその限界：
関係流動性の変化に伴う心理的順応の検討

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の特筆すべき意義として、以下の3点を挙げるができる。

第1は、文化心理学や文化進化論に対する貢献である。近年の文化心理学研究では、日本を含む世界の多くの国々で社会・経済制度や文化的産物の個人主義化が進む一方で、価値観や行動といった人々の心理に関しては、相対的に変化が鈍い、もしくはむしろ個人主義化とは逆方向の変化すら観察されるというパラドキシカルな現象が報告されてきた。また、本研究が注目した関係流動性についての先行研究においても、歴史的に低関係流動的であった多くの国や地域において、法制度等による公的な拘束が緩められた現在でもなお、相変わらず低流動的な社会関係が温存されていることが見出されている。しかし、こうした心や対人関係の変化のしにくさの原因について、先行研究が十分に解明してきたとはいい難かった。

本研究は、この疑問に対して、人間の心の可塑性の限界が対人関係の流動化を妨げている可能性を新たに指摘した。そして、その仮説を、関係流動性の異なる環境間の移動、もしくは同一環境内での関係流動性の変化を経験した人々を対象に、直接的もしくは擬似的な追跡調査を用いることにより検証した。その結果、人の心は、関係流動性の変化に対して比較的迅速に順応する側面と、順応が十分に追いついていかない側面を持つ、すなわち限定的な可塑性を持つことが示された。この知見は、近年文化変化のプロセスの解明と将来予測を射程に収め始めた文化心理学や文化進化論にとって高いインパクトを持ちうるものだといえよう。

第2に、本研究の知見には、行動生態学を含む生物諸科学に対する貢献もある。これらの分野の先行研究では、主に人間以外の動物を対象として、環境変動に対する順応の速さが検討されてきた。しかし、このような観点から人間心理の性質を検討した先行研究は非常に少なかった。環境変動に対する人間心理の限定的な可塑性を示した本研究の結果は、人間心理の行動生態学的分析をより進展されるために役立つだろう。

第3は、応用的意義である。現在、日本を含む伝統的に低関係流動的だった多くの国や社会が、否応なしにグローバル化の波に巻き込まれている。その中で、人々には、関係流動性が高い社会環境に迅速に適応し、例えば、自ら積極的に対人関係を獲得・維持できるようになることが要求されている。しかし、この課題はしばしば困難を伴い、例えば、多くの人々が社会的孤立に苦しんでいる。本研究の結果は、こうした社会問題の背景の一つとして、社会関係の急速な流動化に対して、人々の心理の順応スピードが間に合っていない可能性を示唆している。本研究の結果は、現代社会が直面するこうした喫緊の課題を乗り越えるための方策を練る上で有益な示唆を与えてくれることが期待される。

・学位授与に関する委員会の所見

審査委員会は、以上を含む本論文の学術的価値を高く評価した。一方で、調査設計の計画性が十

分とはいえない、知見が適用可能なタイムフレームが不明確であるなど、いくつかの問題点も指摘された。しかしこれらの問題は、申請者が今後さらに実証研究と理論的考察を積み重ねる中で解決されるべきものであり、上述の卓越した貢献を損ねるものではない。

以上を総合的に評価し、本委員会は全員一致して小楠なつき氏に博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。